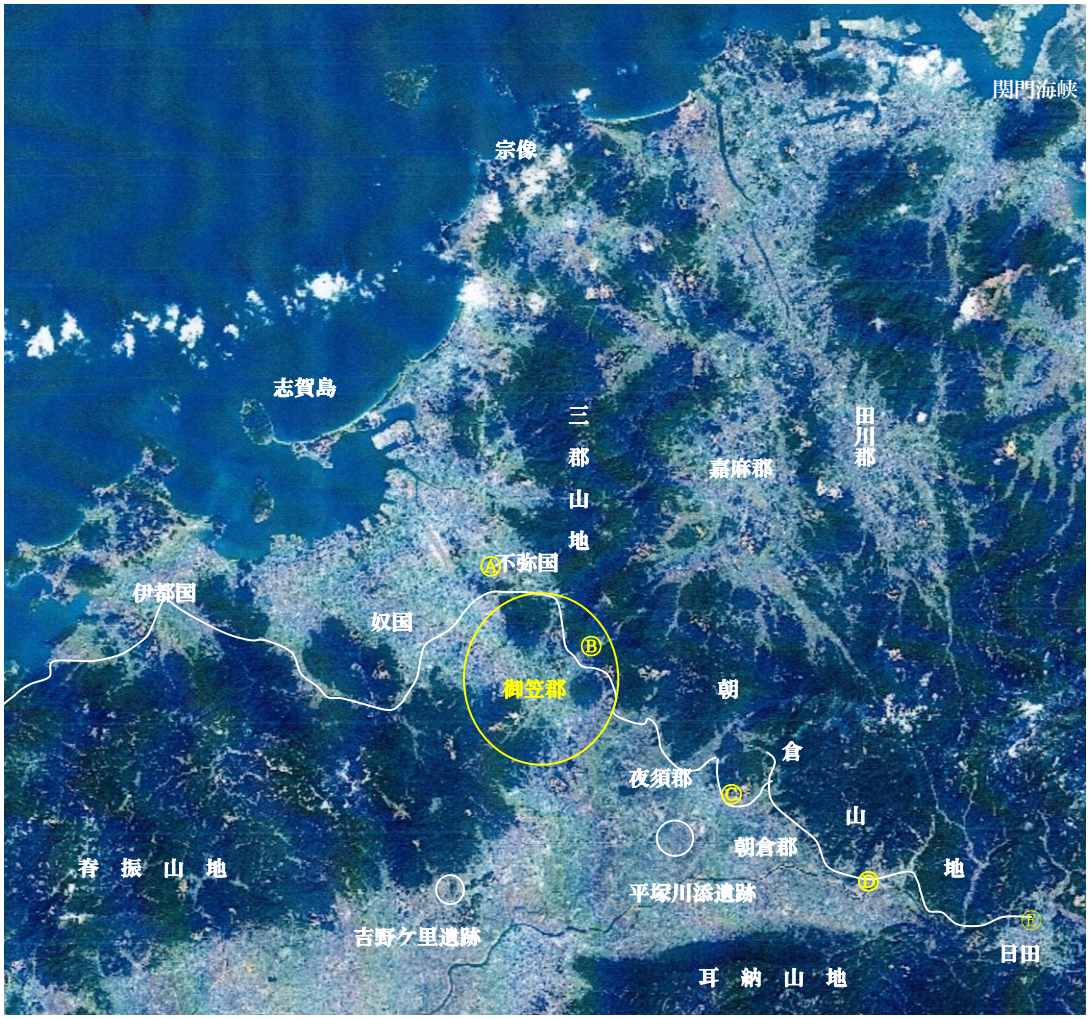
連載第 16 回

邪馬台国の時代⑪
～朝倉をゆく～

河村哲夫

朝倉郡



すでに述べたとおり、御笠郡からは邪馬台国の領域のなかを進んでいる(とみている)。

上図でいえば、脊振山地の方向でもなく、三郡山地の方向でもなく、朝倉山地方面に進んでいる。

宇美八幡宮(不弥国)から、旧夜須郡・旧朝倉郡を経て、最東端の日田までの距離を測れば次のとおりとなる。このコースのいずれかの地に邪馬台国の拠点があった(とみている)。

宇美八幡宮 (不弥国) Ⓐ	竈門神社 (御笠郡) Ⓑ	甘木 (夜須郡) Ⓒ	恵蘇八幡 (朝倉郡) Ⓓ	日田市 (豊後国日田郡) Ⓔ
区間距離	6 km	15 km	11 km	19 km
累計距離	6 km	21 km	32 km	51 km

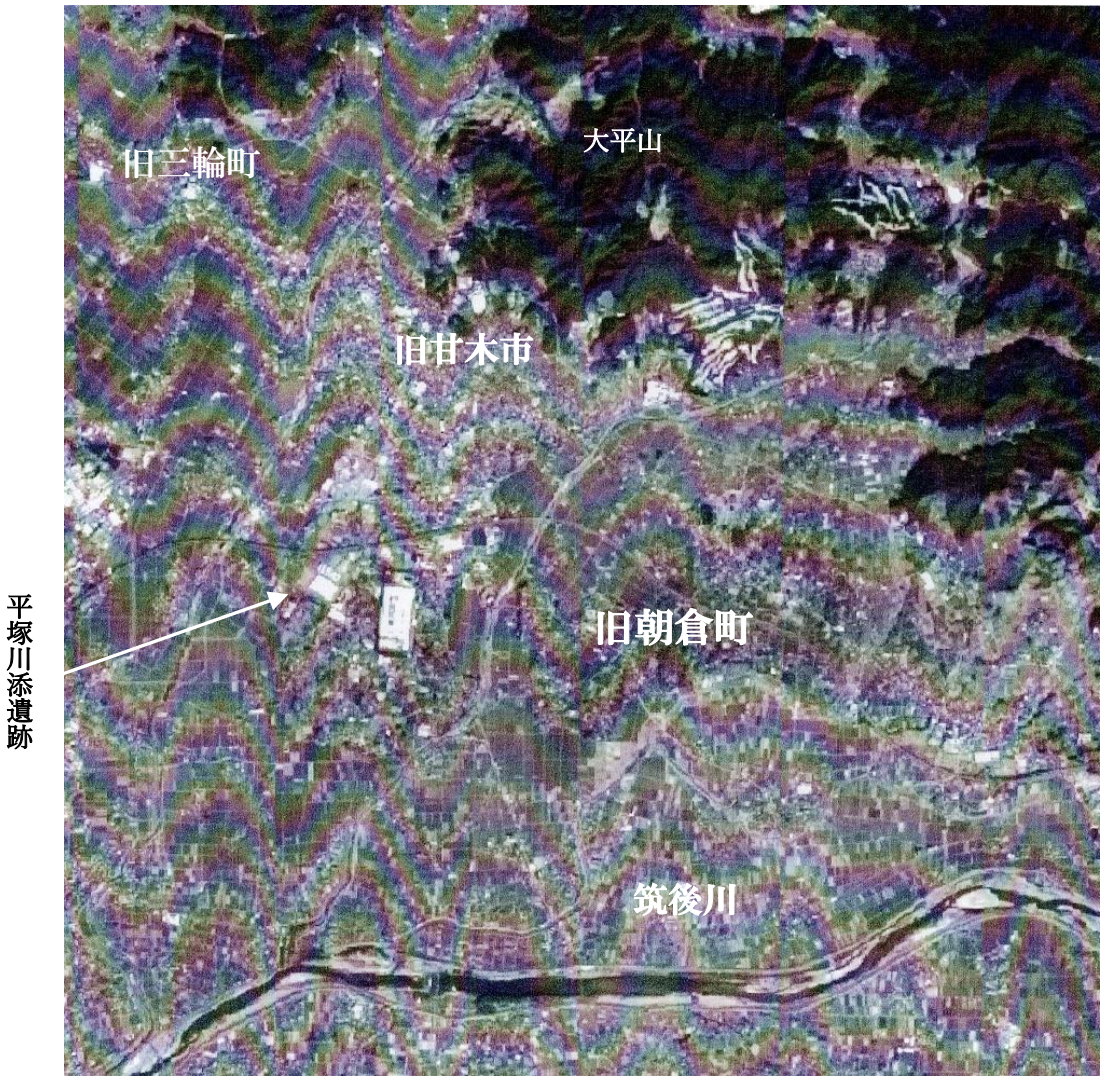
旧朝倉郡は、西北側に旧夜須郡が隣接し、東方向へ下座（しもざ・しもあさくら）郡・上座(かみざ・かみあさくら)郡が並んでいる。

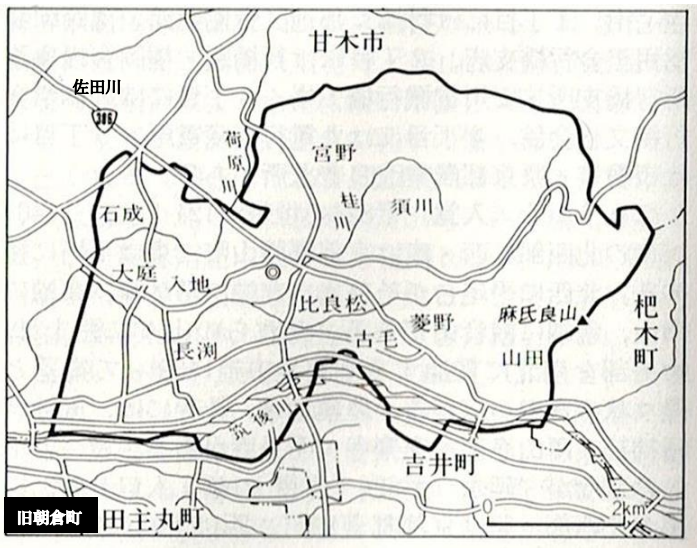
旧上座郡のうち、小石原村と宝珠山村を除いた区域が旧朝倉町と旧杷木町で、現在は旧甘木市とともに朝倉市に編入されている。

夜須郡・朝倉郡の変遷

旧郡名		現市町村名	旧市町村名	旧村名
夜須郡		筑前町	旧夜須町	夜須村(三根村・中津屋村・安野村)
			旧三輪町	三輪町(大三輪村・栗田村)・安川村
		朝倉市	旧甘木市	馬田村 秋月町(下秋月村・野鳥村)・上秋月村 甘木町(甘木村・菩提寺村)
朝倉郡	下座郡	朝倉市	旧甘木市	立石村・福田村 三奈木村・金川村・蜷城村
	上座郡	朝倉市	旧朝倉町	高木村・宮野村・朝倉村 大福町(大庭村・福成村)
			旧杷木町	杷木村・池田村・白木村・林田村・穂坂村 松末村・久喜宮村・志波村
		東峰村	旧小石原村	小石原村
			旧宝珠山村	宝珠山村

旧朝倉町


旧三輪町
大平山
旧甘木市
旧朝倉町
筑後川
平塚川添遺跡

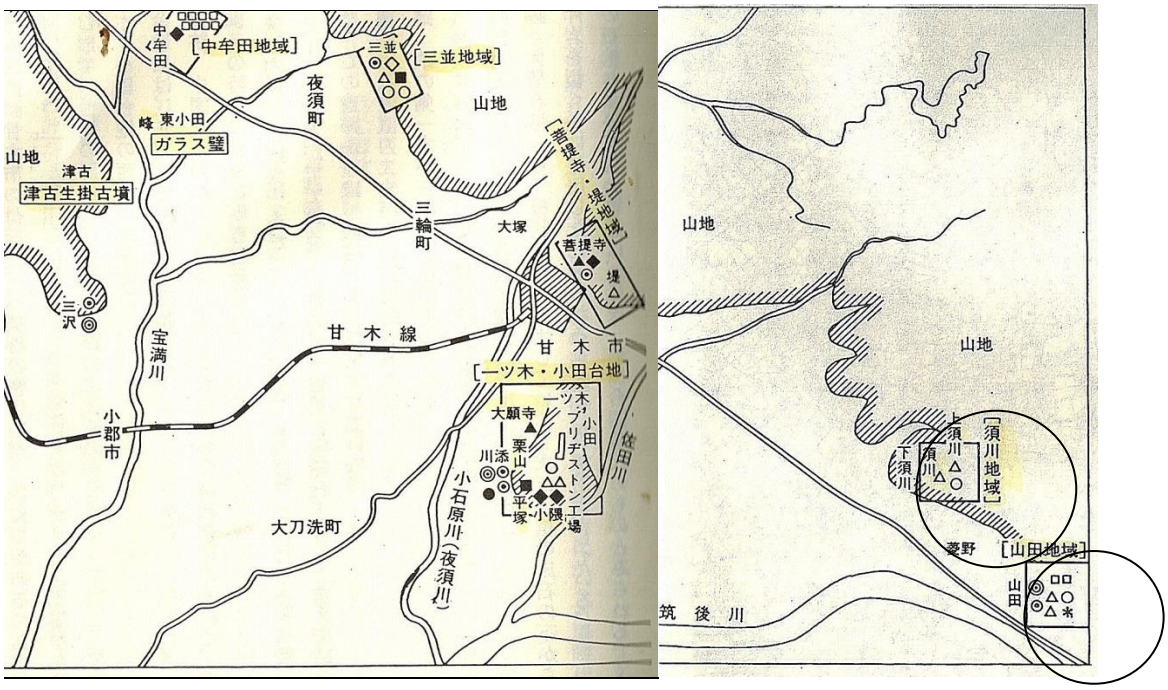

甘木市
佐田川
荷原川
宮野
桂川
須川
石成
大庭
入地
比良松
菱野
麻氏良山
杷木町
長渕
古毛
山田
筑後川
吉井町
旧朝倉町
田主丸町
0
2km

旧朝倉町大字図

旧朝倉町の遺跡

安本美典氏の『邪馬台国への道』（梓書院）に掲載された邪馬台国時代の遺跡図を再掲すると、旧朝倉町の【須川地域】に鉄剣・鉋（やりがんな）、旧杷木町との境界に位置する【山田地域】に「長宜子孫」銘内行花文鏡・小型仿製鏡・鉄鏃・鉄剣・鉄片のマークがしめされている。

確かに須川地域の上須川山田石棺から素環頭鉄剣が出土し、山田地域の山田後山（うらやま）遺跡の箱式石棺から後漢鏡と小型仿製鏡が出土している。



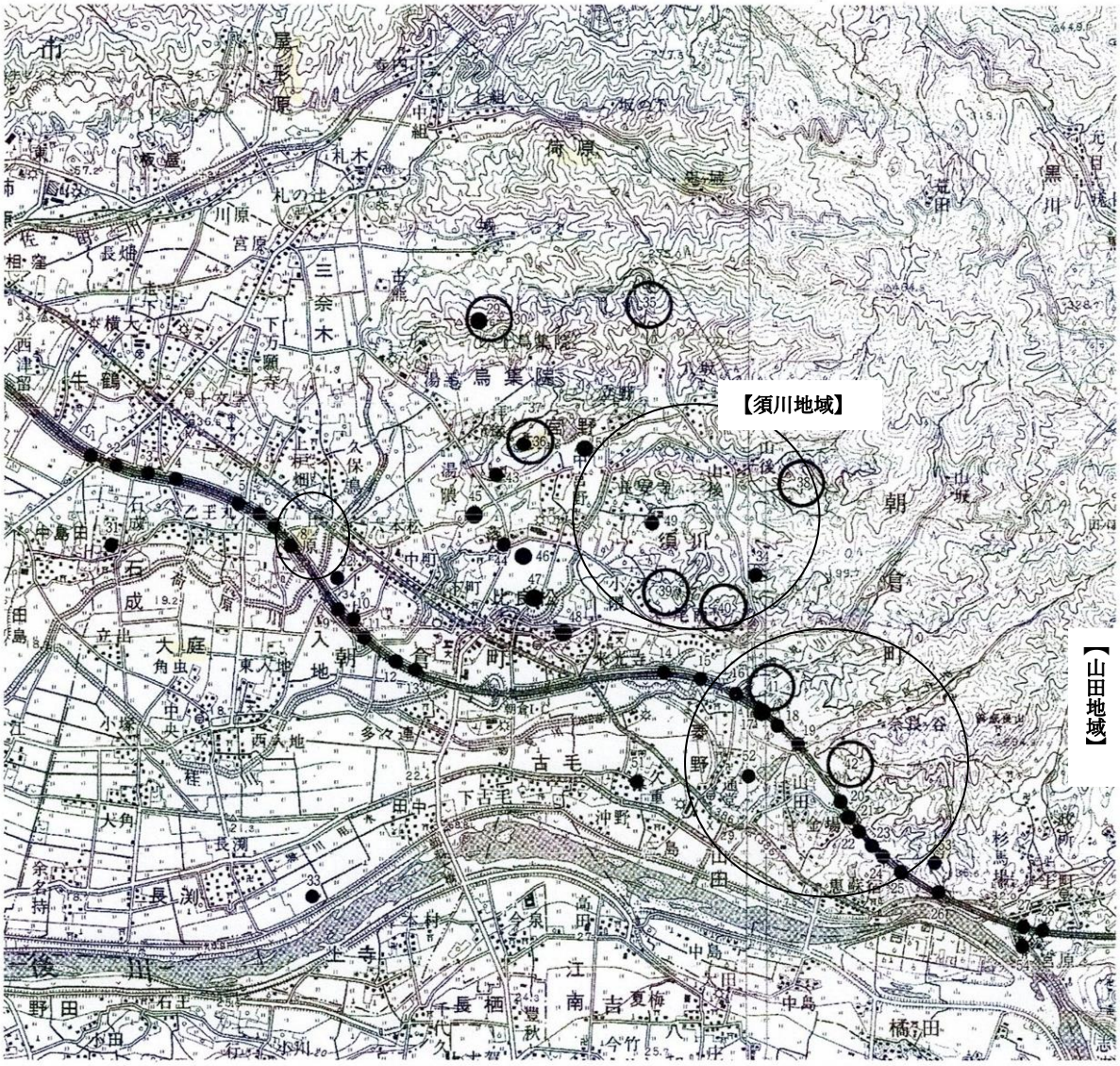
【須川地域】

【上の原遺跡】

【山田地域】

旧朝倉町の遺跡【『埋もれていた朝倉文化』福岡県立朝倉高校史学部・昭和 44(1969)】

なお、九州横断自動車道の建設に伴い、福岡県教育委員会によって昭和 54 年(1979)度から平成 2 年(1990)度までの 12 年間に福岡県内 62 か所に上る埋蔵文化財発掘調査が行われた。その結果は、「九州横断自動車道関係埋蔵文化財報告」(1～56)にまとめられ、貴重な情報を提供している。次の遺跡図もその成果に基づくものである。



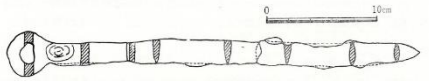
1	塔ノ上遺跡	15	中妙見遺跡	29	烏集院古墳	42	山田古墳群
2	大環端遺跡	16	原の東遺跡	30	烏集院古墳群	43	湯の隈古墳
3	石成久保遺跡	17	堤古墳	31	石成遺跡	44	矢林遺跡
4	中道遺跡	18	鎌塚遺跡	32	大庭宇土ノ上遺跡	45	中の原遺跡
5	西法寺遺跡	19	山の神遺跡	33	長渕南方遺跡	46	前畑遺跡
6	経塚遺跡	20	長田遺跡	34	須川ノケオ遺跡	47	八並遺跡
7	大庭久保遺跡	21	金場遺跡	35	北八坂古墳群	48	井出野遺跡
8	上の原遺跡	22	上の宿遺跡	36	宮地嶽古墳	49	長安寺廃寺跡
9	狐塚南遺跡	23	恵蘇山遺跡	37	宮地嶽古墳群	50	垣添遺跡
10	治部ノ上遺跡	24	稗畑遺跡	38	山後山古墳群	51	古毛遺跡
11	座禅寺遺跡	25	大迫遺跡	39	小隈古墳群	52	剣塚古墳
12	才田遺跡	26	外之隈遺跡	40	上須川古墳群	53	本陣古墳
13	東才田遺跡	27	杷木宮原遺跡	41	妙見墳墓群	54	志波宝満宮古墳
14	長島遺跡	28	中町裏遺跡				

第２図　朝倉町周辺遺跡分布図（1/50,000）

旧朝倉町の主要な遺跡

時　代	遺物・遺構	遺跡名：(　)は地図 No
旧石器(先土器)	ナイフ形石器 台形石器など	原の東遺跡(16) ・鎌塚遺跡(18)・山ノ神遺跡(19) 上の宿遺跡(22)
縄文時代早期	石組炉 集石遺構	原の東遺跡(16)
	押型文土器	座禅寺遺跡(11)・長田遺跡(20)
	土壙	治部ノ上遺跡(10)【土壙 14 基】
縄文時代前期	住居跡	外之隈遺跡(26)
	轟式土器	上の宿遺跡(22)
縄文時代中期	並木式土器	上の宿遺跡(22)・稗畑遺跡(24)
縄文時代後期	西平式土器	稗畑遺跡(24)
縄文時代晩期	貯蔵穴 土壙	原の東遺跡(16)・長田遺跡(20)
弥生時代	住居 貯蔵穴群	原の東遺跡(16)・鎌塚遺跡(18)・長田遺跡(20) 中道遺跡(4)・上の原遺跡(8)・長島遺跡(14)
	墓地	原の東遺跡(16)・大庭久保遺跡(7)・上の原遺跡(8) 上の宿遺跡(22)
弥生時代終末 ～古墳時代初期	下記のとおり	天皇山石棺群・上須川山田石棺・山田後山遺跡 妙見墳墓群(41)・志波桑ノ本遺跡・田島北遺跡
古墳時代	集落	上の原遺跡(8)・長島遺跡(14)
	墓地	治部ノ上遺跡(10)・座禅寺遺跡(11)・上の宿遺跡(22) 外之隈遺跡(26) 虚空蔵古墳群・北八坂古墳群(35)・須川ノケオ遺跡(34) など朝倉町で約 300 基の古墳

弥生時代終末ごろ～古墳時代初頭期の遺跡

遺跡名	内　容	年代など
天皇山石棺群	箱式石棺墓 6 基、石土壙墓 2 基 副葬品は鉄器(剣・鉋)	土壙から平底の手焙形土器が出土→ 弥生時代後期
上須川山田石棺	合葬された 2 人の人骨、素環頭鉄剣	弥生末期～古墳前期 全長 37.5 センチ 
山田後山遺跡	箱式石棺 4 基、うち 1 号棺から連弧文鏡片、2 号石棺から小形仿製鏡が出土	小型仿製鏡Ⅱ型ｂ類 長宜子孫内行花文鏡 (連弧文鏡・後漢鏡) →弥生後期～終末
妙見墳墓群	石棺・石蓋土壙墓・方形周溝墓 38 基 鉄器 8 点、ガラス玉 2 個	布留式期の墳墓群
志波桑ノ本遺跡	墳墓群と住居群	布留式期の遺構あり 外之隈遺跡から東方 1 キロに所在
田島北遺跡	竪穴住居・石棺墓・カメ棺墓 方形周溝遺構	布留式期並行期

甘木丘陵から東側に延びた旧朝倉町の烏集院・宮野・須川・菱野・山田などの山間部およ

び丘陵地にも、各時代の膨大な遺物・遺跡が存在している。

前述したように、夜須郡にも膨大な遺物・遺跡が存在している。

旧夜須郡・旧朝倉郡において、戦後の大規模土地開発や農地整備事業などで遺跡破壊が進んだにもかかわらず、新たな遺跡が発見されつづけている。

佐賀県の脊振山地の山間部および丘陵地でも状況はおなじである。

そして、九州新幹線や九州縦貫自動車道の整備に伴う埋蔵文化財調査によって、調査範囲はさらに拡大し、その調査結果について、九州歴史資料館や大学などの研究機関において、さまざまな分析が今なお進められている。

ただし、これまでのところ、「親魏倭王」の金印はじめ卑弥呼や邪馬台国と直接結びつく遺物や文書など、決定的な資料は出土していない。

竈門神社(御笠郡)から恵蘇八幡宮(朝倉市山田)までは約 26 キロ――普通に歩いて 1 日半程度の距離である。旧朝倉町が、距離的にも地勢的にも、筑紫平野における邪馬台国拠点の有力候補地の一つであることはまちがいない。

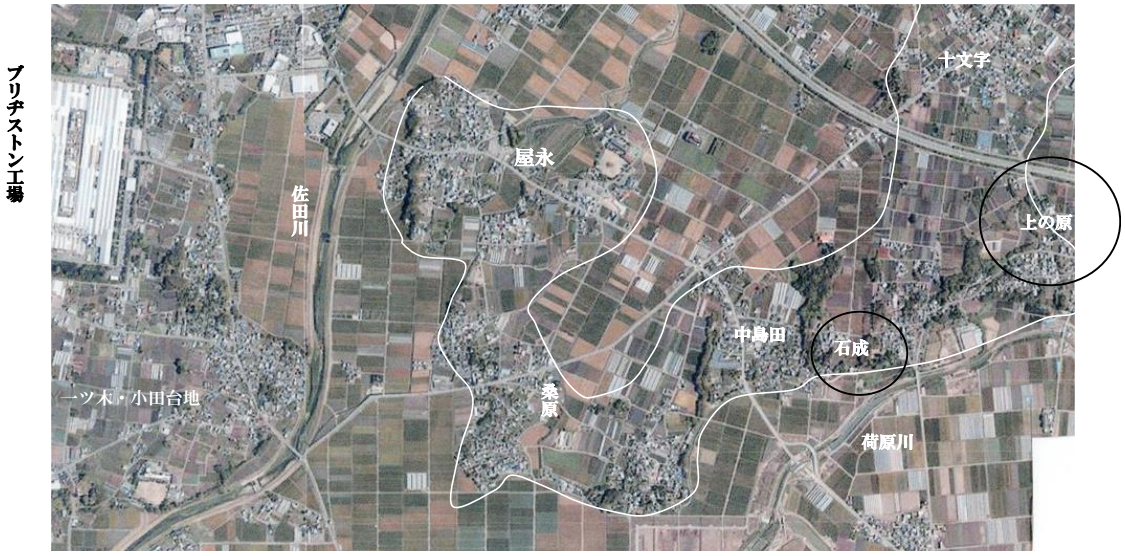
ということで、旧朝倉町各地域の代表的な遺跡を、この際いくつか紹介しておこう。

【三奈木・中島田丘陵】

佐田川と荷原川にはさまれた三奈木・十文字・中島田にも、下図のとおり低丘陵――いわゆる洪積台地がある。これを【三奈木・中島田丘陵】と呼ぼう。

上の原遺跡

その丘陵の東南部に、上の原遺跡(遺跡地図 7)がある。



弥生～奈良時代にかけての大集落遺跡で、弥生時代の遺構としては、住居跡・竪穴・土壙・貯蔵穴・カメ棺墓・木棺墓・土壙墓などが出土している。

また、上の原遺跡南方の石成地区からは、弥生中期の須玖式カメ棺 13 基および石棺 3 基、丹塗土器などが出土している(『埋もれていた朝倉文化』)。

上の原から石成地区にかけての丘陵に「クニ」としてのまとまりが感じられるという(「朝倉町文化財調査報告書 10」)が、それにくわえて西側の桑原・屋永地区との一体性や、さらに西に位置する一ツ木・小田台地の大集落との強い結びつきを考慮すべきことは明らかであろう。

【烏集院】

地元の伝承では、烏集院（うすのいん）という地名は南北朝時代の第 98 代長慶天皇(在位 1368～1383)に由来する。

後村上天皇(在位 1339～1368)の第 1 皇子で、南北朝時代の動乱のなかで、天皇即位後も摂津の住吉、吉野、奈良の栄山(えいざん)寺などの行宮を転々とし、譲位後は数年間院政ののち出家して仏門に帰したという。

長慶天皇の在位の存否については江戸期においても議論が分かれていたが、大正年間に在位を実証する『耕雲千首奥書』が発見され、また八代国治(やしろくにじ)（1873～1924）の『長慶天皇御即位の研究』によって在位説が優勢となり、1926 年（大正 15）10 月に皇統加列の詔書が下された。

なお、応永元年(1383)に崩御したとされるが、その地について全国に73か所もの伝説があったため、宮内大臣は昭和10年(1935)6月に臨時陵墓調査委員会を設置し、4 人の小委員会メンバーに諮問したものの、5年7か月かけても選定することができず、やむなく政府は昭和 19 年

（1944）2 月京都嵯峨野の慶寿院址を嵯峨東陵と定めて幕引きを図った。

実は、朝倉市には須川の高木神社の裏山に「天皇山」または「黒巌(くろいわ)山」（120 メートル）という山があり、長慶天皇を葬ったという伝承が残されている。

全国行脚の途中この地を訪れた長慶天皇は、筑後川を往来する帆掛船の風景に感動し、「自分が死んだらここに葬るよう」遺言を残してこの山に葬られ、そのため天皇山と呼ばれるようになったという。

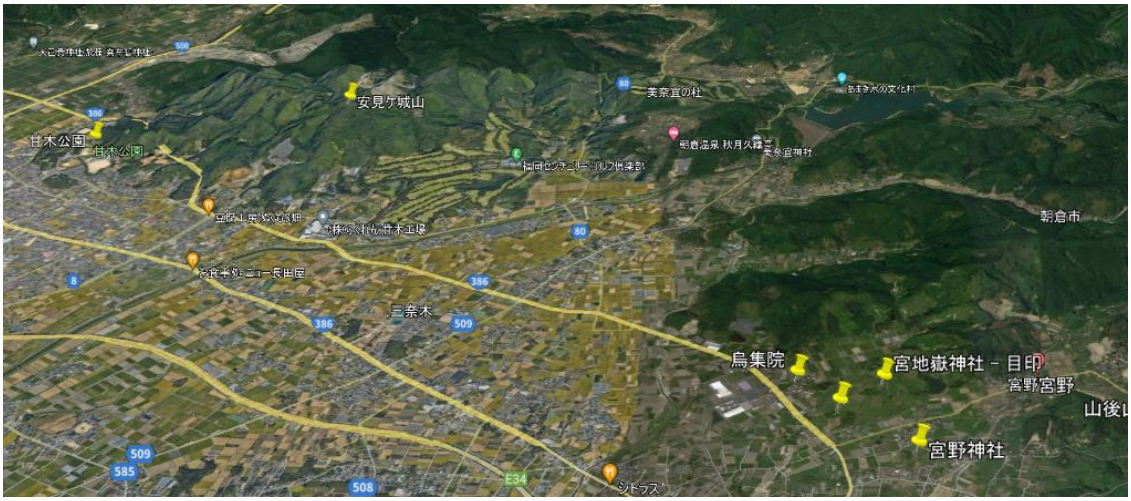
しかしながら、朝倉町の天皇山は 12 か所に絞り込まれた最終調査地から漏れてしまった。そして、前述のとおりすべての候補地が却下されてしまった。

――4 人の委員による主観的な選考だ。

として、それを今だに恨む声は根強いが、残念ながらそれをくつがえすだけの物証もない。

いずれにしても、長慶天皇はしばしば朝倉の地に巡幸され、烏集院に行宮を構えられたというのは、地元朝倉の確たる伝承である。

なお、天皇山からは弥生時代後期の箱式石棺墓なども出土しているが、【須川】の項で紹介しよう。



【宮野】

江戸期の『筑前国続風土記拾遺』によると、宮野という地名は斉明天皇に由来するという。

661 年、斉明天皇は百済を支援するため、皇太子の中大兄皇子以下を率いて九州へ渡り、この朝倉の地において、「朝倉橘広庭宮」すなわち「朝倉宮」を造営した。

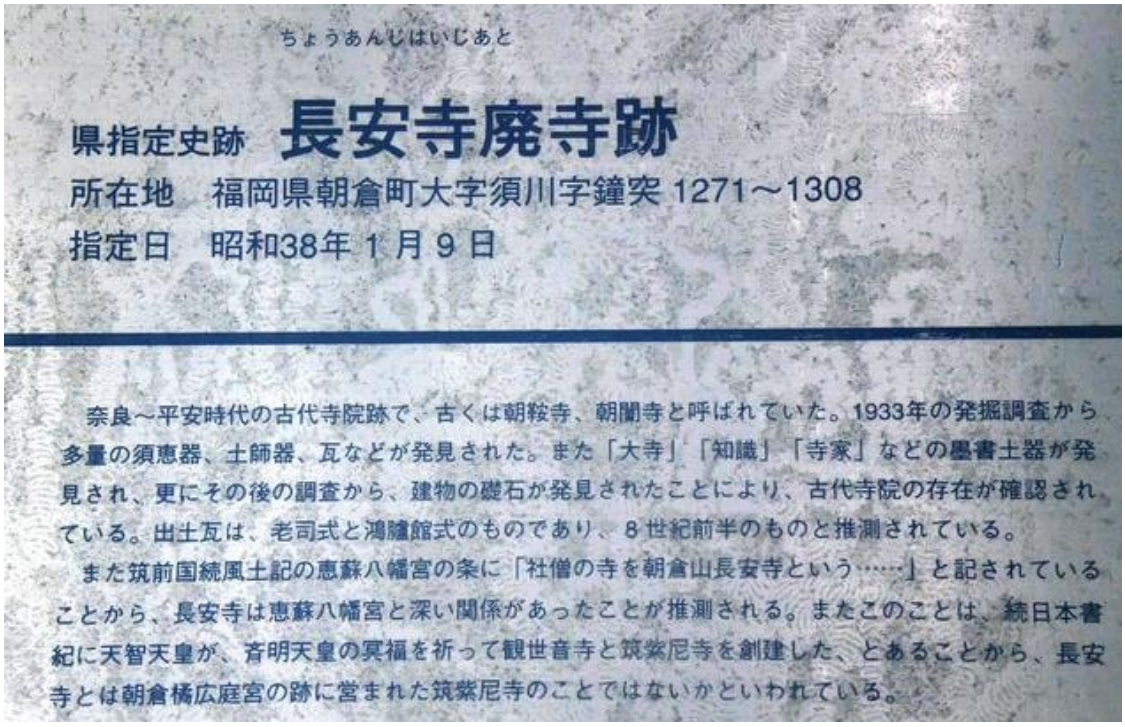
その所在地について説が分かれている。

①旧朝倉郡朝倉町須川説

②旧朝倉郡朝倉町山田説

③旧朝倉郡杷木町志波説

江戸時代の『朝倉紀聞』(古賀右仁衛門)・『筑前国続風土記』(貝原益軒)や地元の伝承などでは、①の「須川説」――すなわち、宮野村下須川の地が最も有力とされ、奈良時代の寺院跡である長安寺廃寺跡に「橘廣庭宮之蹟」の碑が建てられた。



しかしながら、九州歴史資料館の 3 年にわたる発掘調査にもかかわらず宮殿跡は発見されず、昭和 51 年(1976)3 月に「須川説」は一応否定された。

一方、「山田説」によれば、朝倉宮は「木の丸殿」とも呼ばれたともいい、恵蘇(えそ)八幡宮境内(旧朝倉町山田)に「朝倉木之丸殿旧蹟碑」が建てられている。

また、恵蘇八幡宮本殿裏には、斉明天皇の殯を行ったと伝えられる円墳 2 基が残っている。

ただし、周辺から採取された遺物から、古墳時代(5 世紀ごろ)の築造とみられており、斉明天皇の殯斂地とするには時代が合わないとされている(「朝倉橘広庭宮の謎をめぐって」遠藤啓介)。

近年では、九州歴史資料館の小田和利氏の考証などにより、「志波説」が有力になりつつある。

のちほど紹介したい。

宮地嶽神社

宮野には、宮地嶽があり、宮地嶽神社が祭られている。

御笠郡にも宮地岳(筑紫野市山家)があり、宮地嶽神社(筑紫野市原田)が祭られている。

宮地嶽神社といえば、福津市の宮地嶽神社がいわば総本山である。

境内の宮地嶽古墳は宗像徳善の墓といわれている。娘の尼子姫は天武天皇との間に高市皇子(654?～696)をもうけた。その子が長屋王(？～729)である。宗像徳善との関係からみても、立地からみても宗像系である。

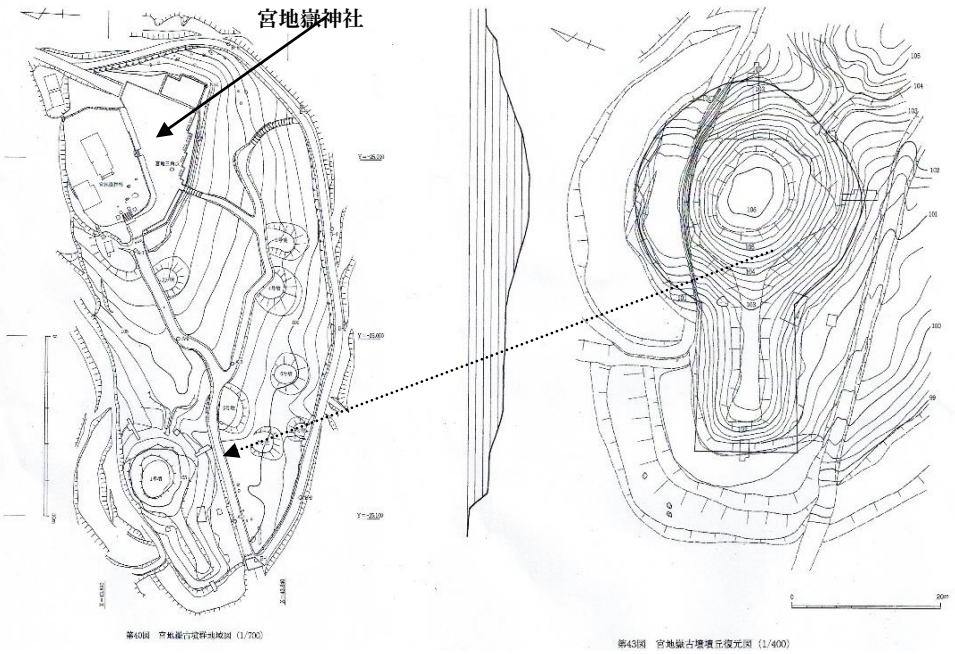
神功皇后とともに祭られている勝村神・勝頼(依)神は、朝鮮出兵時に活躍した宗像一族の領袖であったのだろう。阿部高丸・阿部助丸という名でも伝えられているから、相島(糟屋郡新宮町)とも関係の深い海人族であったのだろう。相島は、「吾瓮(あへ)」「阿恵(あえ)」「藍(あい)」「饗(あえ)」「阿閉(あへ)」などとも書かれた。

所在市	所在地	名称	祭神
福津市	宮地岳(172m)	宮地嶽神社	神功皇后・勝村大神・勝頼大神
朝倉市	宮地嶽(109.4m)	宮地嶽神社	神功皇后・勝村神・勝依神
筑紫野市山家	宮地岳(338m)		
筑紫野市原田 字岩ノ狩倉		宮地嶽神社	神功皇后・阿部高丸・阿部助丸

宮地嶽信仰ないし宮地嶽大明神信仰は、神功皇后に随行して朝鮮に渡った宗像一族を称える古い祭祀が、仏教伝来後おそらく修験者などを通じて、山の神などとして朝倉や筑紫など各地にもたらされたのであろう。

宮地嶽古墳群

宮野の宮地嶽山麓一帯に所在する古墳群である。前方後円墳など約 20 基の古墳が確認されていたが、九州横断道路関係調査によって新たに 8 基の円墳が確認された。前方後円墳からは初期埴輪などの出土や墳丘の形状から、前期古墳で 4 世紀後半の築造であろう。



第40図　宮地嶽古墳群地域図（1/700）

第43図　宮地嶽古墳墳丘復元図（1/400）

なお、宮地嶽中腹から南西せり出した丘陵頂部に、「湯の隈古墳」が確認されている。墳丘は大きく削られているが、直径 20mほどの円墳とみられている。複室の横穴式石室で、奥壁と側壁の一部が装飾が施されているが、風化のため文様はほとんどわからなくなっている。6 世紀後半ごろの古墳か。

【須川】

前述したように、須川には長慶天皇を葬ったとされる天皇山(120 メートル)がある。

高木神社【朝倉市須川 (旧宮野村大字須川字上須川)】の裏山に位置する。

高木神社の看板は次のとおり。

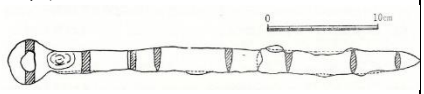
高木神社
所在地　朝倉町大字須川字上須川
祭神　高皇産霊尊

別に大行事社とも云い、当須川の氏神である。星野家初代の星野胤実の創建とあり、弥生（四月）と菊月（十月）の十七日に祭りが行われている。古、此所に大東寺と云う寺ありき、と朝倉紀聞と云う古い本に書かれている。
第九十八代長慶天皇度々この地に来られ、特に裏山の黒巌がお気に入りであった。応永七年三月十七日にお亡くなりになると、星野胤忠は御遺言により黒巌山の頂上に埋葬、その後、この山のことを天皇山と呼ぶようになった。又近くに千代田・亀山と云う地名が残っている。尚、裏山裾には多数の古墳がある。

朝倉町教育委員会

須川地区には、天皇山古墳群・石棺群のほか、鐘突古墳群、虚空蔵古墳群、千代田古墳などの弥生・古墳時代の遺跡群が密集している。この「須川遺跡群」について、昭和43年(1968)に農業改善事業の事前調査として、朝倉町教育委員会が朝倉高等学校史学部に委託して発掘調査を実施した。

その結果、弥生・古墳時代を中心とした遺物約百点が一括して朝倉市の文化財に指定されている。

遺跡名	内　容	年代など
天皇山石棺群	箱式石棺墓6基、石土壙墓2基 副葬品は鉄器(剣・鉋)	土壙から平底の手焙形土器が出土→弥生時代後期
上須川山田石棺	合葬された2人の人骨、素環頭鉄剣	弥生末期～古墳前期 全長37.5センチ 
山後山古墳群(38)	山の斜面や谷につくられた25基以上の群集墳。	古墳時代の終わりごろ(7世紀代)
上須川古墳群(40)	約10基の古墳群 竪穴式小石室 須恵器・土師器・鉄器	古墳時代

【菱野】

原の東遺跡(朝倉市菱野・地図 No.16)

標高 57 メートルの中位段丘先端にあり、須川地区と山田地域にはさまれている。

昭和 58 年(1983)～昭和 63 年(1988)の調査によって、旧石器(先土器)時代から 7 世紀後半に至る大規模な複合遺跡であるとされた。旧石器(先土器)時代の五層の文化層が確認され、土坑・集石・包含層に伴い、ナイフ形石器・台形石器・角錐状石器・彫器・石刃・石核などが出土した。

この遺跡を垂直に掘り下げてみると、上のほうから奈良時代・古墳時代・弥生時代・縄文時代・先土器時代など 11 層にもおよぶ大規模な複合遺跡であることがわかったという。

そして、テフラ(火山灰)分析の結果、AT 火山灰の降灰層準がある可能性が高いとの指摘がされた。AT 火山灰とは、鹿児島県の姶良カルデラから約 2 万 4～5 千年前に噴出した火山灰のことで、全国各地に降り注いだため、年代測定の一つの基準とされている。

また、縄文時代早期の遺構では 38 基の石組炉と 12 基の集石遺構が、晩期の遺構では貯蔵穴・土壙が確認された。

なお、33 号石組炉は、炭素 14 法による年代測定で 6870 年前の値が算定されたという。

石組炉

もとより、旧石器(先土器)時代・縄文時代・弥生時代の年代区分は、旧石器ねつ造事件を受けて深刻な後遺症が残っており、画期的な年代法として採用された「炭素 14 年代法」およびそれを補完する「年輪年代法」についても、現時点においては科学的に実証された

手法とは言い難いというのが日本考古学の現状である。

一方で、DNA 鑑定に基づく現世人類の地球的規模における移動については世界的に研究が急速に進んでおり、その実態が明らかになりつつある。その結果、現世人類の日本列島への到達は、おおむね 3.5～4 万年前というのが大勢として固まりつつある。

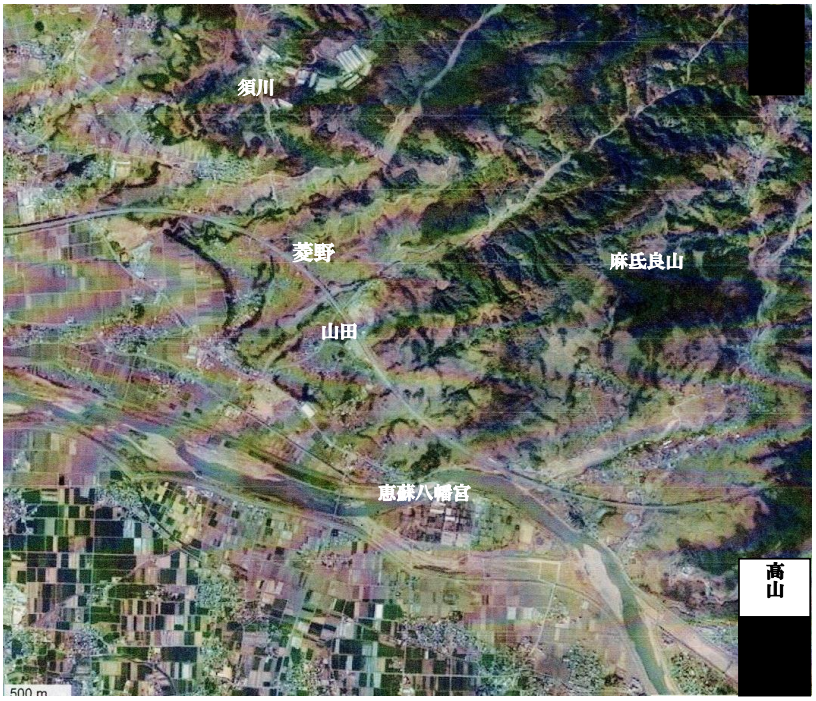
旧朝倉町の丘陵地帯――烏集院・宮野・須川・菱野・山田を結ぶ丘陵地においても、原の東遺跡の状況からみて、少なくとも約 2 万年前ごろまでに人類が到来し、周辺の座禅寺遺跡(11)、鎌塚遺跡(18)、山ノ神遺跡(19)、長田遺跡(20)、金場遺跡(21)、上の宿遺跡(22)、恵蘇山遺跡(23)、本陣遺跡(53)などと一つの大きなかたまりを形成し、狩猟採取を中心とした集落を形成していたと考えられる。

【山田】

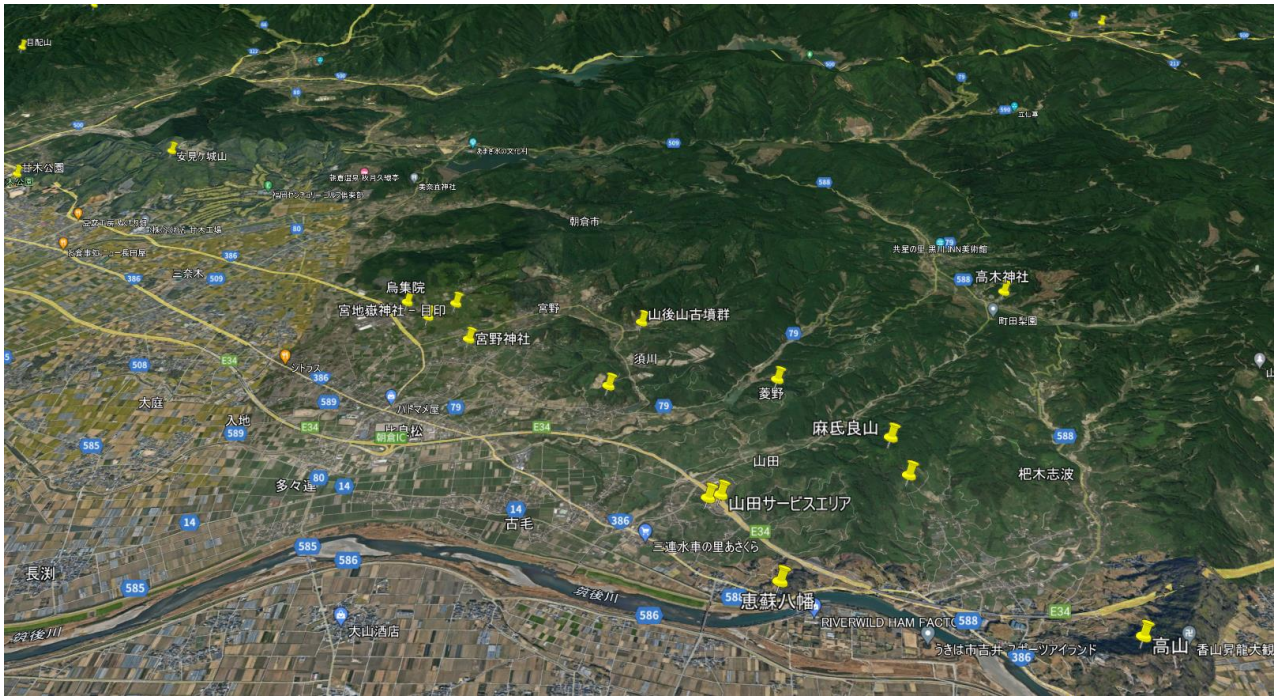
麻氏良山(294.9 メートル)から八手状に延びた丘陵地にも、旧石器（先土器)・縄文・弥生・古墳・奈良時代などの各時代の集落跡や墓地群が多数分布している。

山田地区の主な遺跡

遺跡名	内　容
上の宿遺跡 (地図 No.22)	先土器(旧石器)時代の石器類 縄文早期の陥穴状土壙 2 基 縄文後期の遺物 弥生前期末～中期初頭の木棺墓 48 基、カメ棺墓 10 基 弥生後期の石棺墓 2 基、石蓋土壙墓 1 基 古墳 9 基
恵蘇山遺跡 (地図 No.23)	奈良時代の住居跡 2 軒、掘立柱建物跡 1 棟、土壙 5 基
稗畑遺跡 (地図 No.24)	縄文早期～晩期の土壙 5 基 古墳終末～奈良の住居跡 10 軒、掘立柱建物跡 3 棟



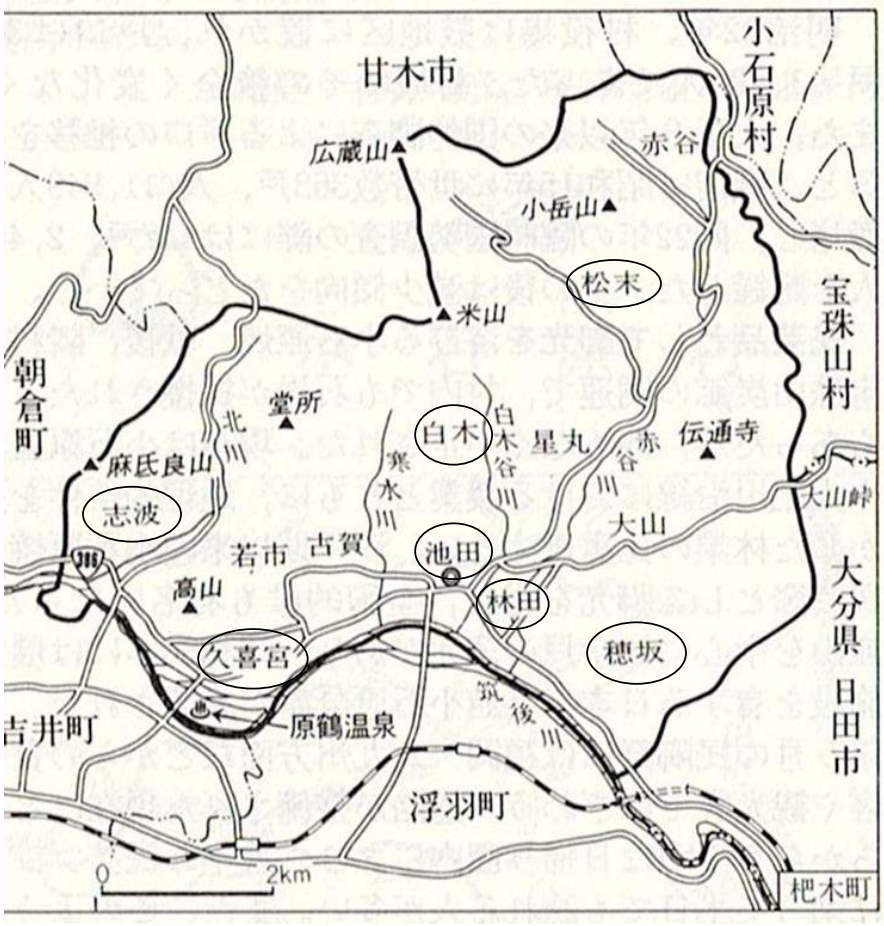
麻氐良山
本陣山
筑後川
山田SA
山田
金場
恵蘇宿
隠家森
恵蘇宿橋
笹尾
杉馬場
杷木志波
上町
中町
下町
宮原
奈良ヶ谷


安見ヶ城山
甘木公園
朝倉市
三奈木
烏集院
宮地嶽神社 - 目印
宮野
宮野神社
山後山古墳群
須川
菱野
麻氐良山
山田
杷木志波
高木神社
町田梨園
大庭
入地
多々連
古毛
山田サービスエリア
三連水車の里あさくら
恵蘇八幡
長渕
筑後川
大山酒店
RIVERWILD HAM FACTORY
高山

旧杷木町

旧朝倉町の東に隣接する旧杷木町は、杷木村･池田村・白木村・林田村・穂坂村・松末(ますえ)村・久喜宮(くぐみや)村・志波(しわ)村などの村々で構成され、町役場は池田に置かれていた。

東には豊後国の日田があり、宝珠山と小石原村を越えれば豊前国である。宝珠山と小石原村の向こうには、英彦山がそびえている。



本陣古墳

旧朝倉町山田の外隈に隣接して、旧杷木町志波の本陣が接している。

本陣と呼ばれるのは、戦国時代に秋月氏によって麻氐良城の防御のための出城が築かれたからである。

その本陣山古城のすぐ西側に本陣古墳がある。葺石を有する直径約 50 メートルの円墳で、古式の円筒埴輪片が採集されているので、4 世紀後半ごろの築造とみられている(「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告」35)。

『先代旧事本紀』によると、景行天皇の九州巡幸を契機として、成務天皇によって多くの国造が全国各地に配属されたことが記されている。

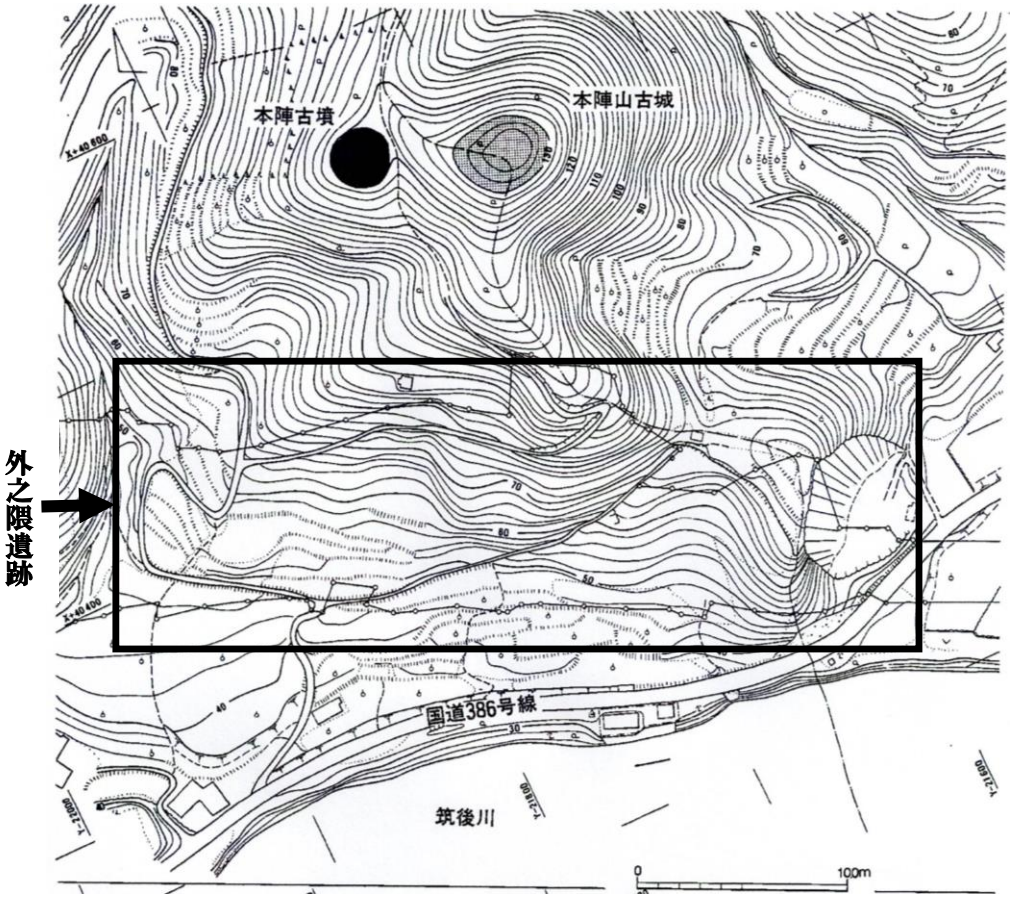
そして、隣接する日田地域には、比多(日田)国造として止波足尼(鳥羽宿禰)なる人物が任

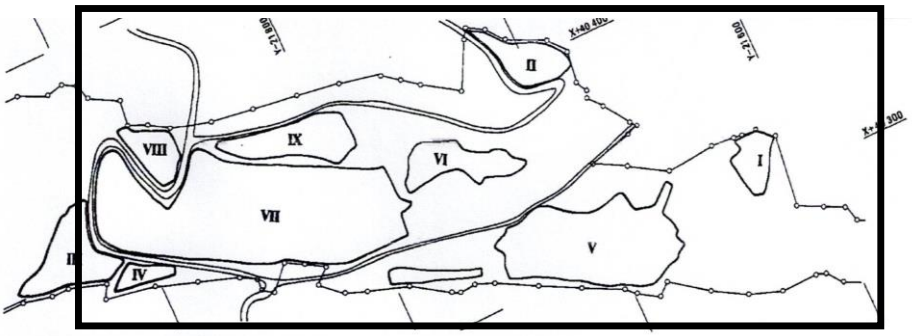
命されている。

この旧杷木町については、そのような記録は残されていないが、日田と同様の任命が行われ、その大和朝廷によって配属された国造およびその一族郎党に関わる古墳のひとつが本陣山古墳とみることもできよう。

外之隈遺跡

その本陣山古城および本陣山古墳の南方の、旧朝倉町と旧杷木町境界の筑後川を眼下に見降ろす丘陵の突き出たところに「外之隈(そとのくま)遺跡」がある。





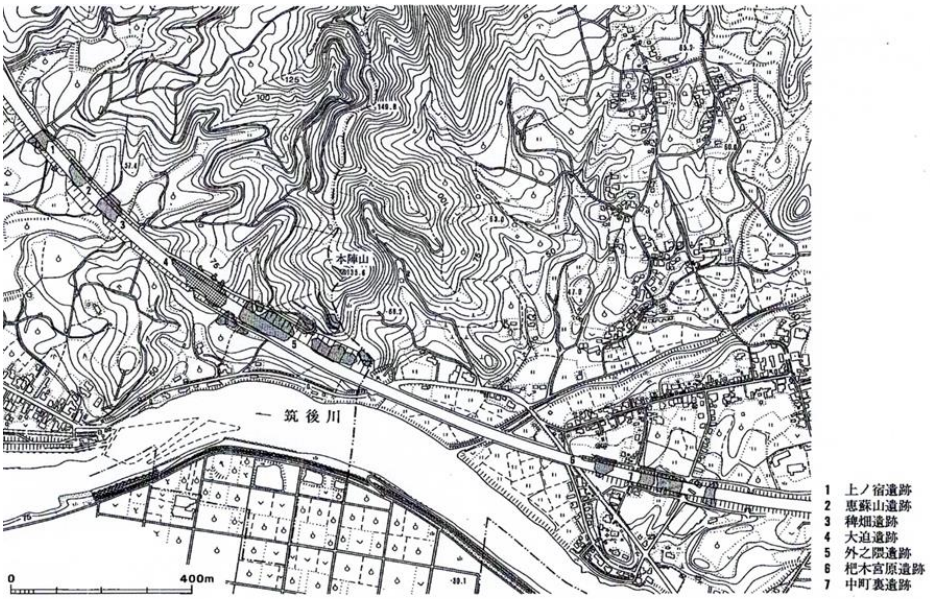
第４図　外之隈遺跡地形図（1/3,000）

Ｉ区からⅨ区までの９つの区画で発掘調査が行われた。

外之隈遺跡の概要

地区	遺構概要	出土遺物	調査期間	調査面積	調査担当者
Ⅰ	墳丘墓・土坑	古式土師器・舶載鏡・鉄器・玉類	871116～880323	約 380 ㎡	伊崎・木村
Ⅱ	墳丘墓・土坑	土師器・舶載鏡・鉄器	871211～880705	約 380 ㎡	〃
Ⅲ	住居・土坑	縄文土器・須恵器・土師器・石器	880107～880309	約 930 ㎡	〃
Ⅳ	住居・土坑	須恵器・土師器・鉄器・土製品・旧石器	881125～881227	約 220 ㎡	井上・小田・日高
Ⅴ	住居・落込み・円墳・近世墓	須恵器・土師器・鉄器・土製品・石器	880119～881012	約 2,870 ㎡	〃
Ⅵ	住居・土坑	須恵器・土師器	881001～881026	約 730 ㎡	〃
Ⅶ	住居・建物・柵列・土坑・溝	須恵器・土師器・鉄器・土製品・旧石器	881001～881226	約 5,840 ㎡	〃
Ⅷ	住居・土坑	須恵器・土師器・石製品	881125～881226	約 470 ㎡	〃
Ⅸ	住居・土坑	須恵器・土師器	900905～901011	約 910 ㎡	〃

そして、外之隈遺跡の西側に横断道路に沿って上ノ宿遺跡、恵蘇山遺跡、稗畑遺跡があり、東側にも杷木宮原遺跡、中町裏遺跡などの遺跡群が連なっており、筑後川を見下ろす丘陵地におびただしい各時代の遺跡群が重層的に密集していることが明らかとなった。



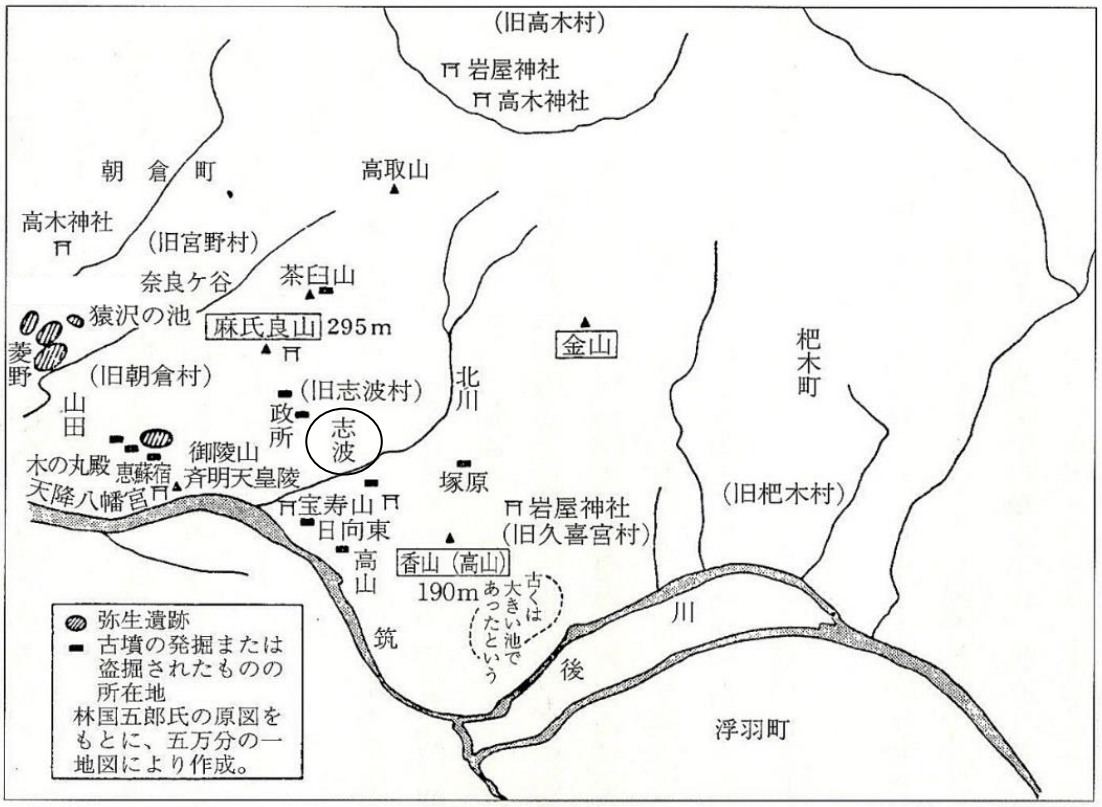
第４図　外之隈遺跡周辺地形図（1/10,000）

遺跡名(地図番号)		概　要
上の宿遺跡(1) (22)		先土器(旧石器)時代の石器類 縄文早期の陥穴状土壙 2 基 縄文後期の遺物 弥生前期末～中期初頭の木棺墓 48 基、カメ棺墓 10 基 弥生後期の石棺墓 2 基、石蓋土壙墓 1 基 古墳 9 基
恵蘇山遺跡(2) (23)		奈良時代の住居跡 2 軒、掘立柱建物跡 1 棟、土壙 5 基
稗畑遺跡(3) (24)		縄文早期～晩期の土壙 5 基 古墳終末～奈良の住居跡 10 軒、掘立柱建物跡 3 棟
外之隈遺跡(4)	Ⅰ	墳丘墓 2 基 (1・2 号墳) 土壙 2 基 (1 号土壙 ・SK1) 出土遺物……画文帯神獣鏡片・勾玉・古式土師器 糸切り底土師器・石斧・人骨 〔過去に内行花文(連弧文)鏡・鉄剣・勾玉・鉄鏃 鉄錐〕
	Ⅱ	墳丘墓 1 基 (1 号墳) <ただし調査区外にもう 1 基〉 土壙 2 基(焼土壙あり) 出土遺物……重圏連弧文鏡片・飛禽鏡 鉄器(鉋・刀子・素環頭？)・土師器・人骨
	Ⅲ	旧石器時代……ナイフ型石器・角錐状石器・石刃 縄文時代……轟B式土器・晩期土器・打製石器・磨製石斧 竪穴住居 1 軒・土穴 2 基 古墳時代……竪穴住居 16軒
	Ⅳ	旧石器時代……台形石器・スクレイパー 古墳時代……須恵器・土師器・鉄鏃先・土玉・土錘 竪穴住居21 軒・土穴5基
	Ⅴ	古墳 1 基 近世墓 3 基(1～3 号) 出土遺物……須恵器・土師器・鉄鏃・磁器・陶器・漆器椀・砥石 鉄釘・数珠玉・寛永通宝
	Ⅵ	古墳時代……須恵器・土師器 竪穴住居2軒・土穴1基
	Ⅶ	旧石器時代……角錘状石器・細石刃 縄文時代……石鏃・打製石斧・磨製石斧 古墳時代……須恵器・土師器・鉄鏃・耳環・砥石・フイゴ・土製品 竪穴住居37軒・建物跡 4 棟・柵列 3 列 土杭 14 基・製鉄遺構 1 基・大溝 4 条・小溝 14 条
	Ⅷ	弥生時代……土器・円形住居跡 1 軒 古墳時代……須恵器・土師器・石製紡錘車 竪穴住居 5 軒・土杭 4 基
	Ⅸ	古墳時代……須恵器・土師器 竪穴住居 3 軒・土杭 2 基
杷木宮原遺跡(5)		掘立柱建物 4 棟、溝 1 条、7 世紀後半の土器
志波岡本遺跡		掘立柱建物 4 棟、7 世紀前半の土器
志波桑ノ本遺跡		掘立柱建物 3 棟、7 世紀後半の土器
大迫遺跡		掘立柱建物 9 棟、竪穴住居 3 軒

朝倉宮志波説

以上述べたとおり、麻氏良山から八手状に延びた丘陵地には、旧石器(先土器)・縄文・弥生・古墳・奈良時代などの各時代の集落跡や墓地群が重層的に分布しており、古代朝倉地方における拠点的な地域であったことは疑いないが、これまでのところ、この地域においても「親魏倭王」の金印はじめ卑弥呼や邪馬台国と直接結びつく遺物や文書など、決定的な資料は出土していない。

ただし、この地には神功皇后伝承も残され、九州歴史資料館の小田和利氏の考証などにより、旧杷木町の志波は斉明天皇の朝倉宮の最有力地となりつつある。



九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査によると、志波に所在する「杷木宮原遺跡」「志波桑ノ本遺跡」「志波岡本遺跡」および旧朝倉町の「大迫遺跡」から、大規模で規則性のある建物群が検出された。これが朝倉宮関連の遺跡とみられ、したがって朝倉宮本体も志波にあった可能性が高いとみられるようになったのである(小田和利、田中正日子など)。

ちなみに、平成 29 年 2 月 11 日に行われた九州歴史資料館小田和利氏の講座資料の抜粋を紹介しよう。

志波台地の建物群

①杷木宮原遺跡…台地(標高41～44m)の突端部に立地し，掘立柱建物4棟，溝1条を検出
建物に伴う出土土器はないが，溝からは7ｃ後半の土器が出土

１号溝　：台地の先端部を弧状に巡る。建物群を防御する濠的な役目

建物配列：2号建物は1号建物の8.8m南西側に並列して配置，3号建物も1号建物の8.8m南東側に並列して配置され，計画的な配列をなす

特　　徴：1・3号建物は桁行が偶数の6間で，西に40°程振る

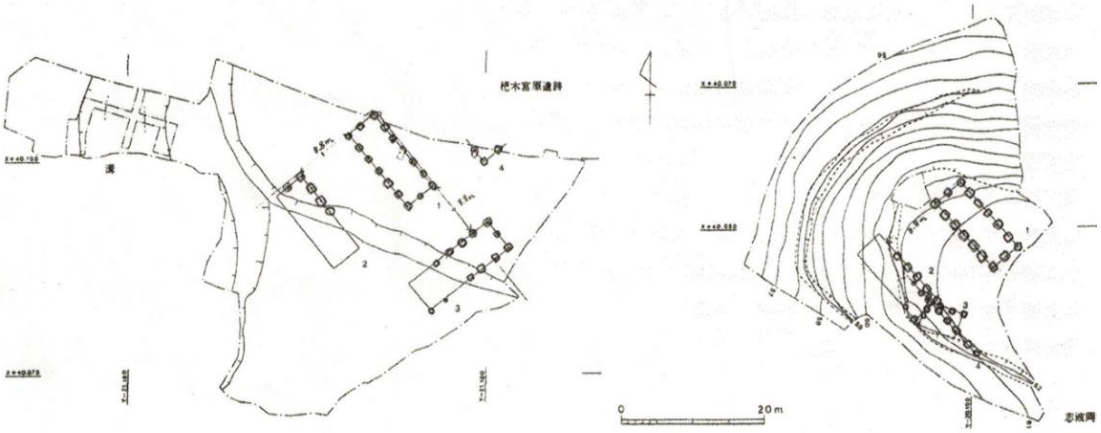
No.	規　模		柱間平均	床面積	柱掘方	掘方寸法	柱　痕	桁行方位
1	2 ×6 間	4.60×12.96m	2.16m	59.6㎡	隅丸方形	0.64～1.14m	16～22cm	N39° W
2	1α×3α間	－	－	－	〃	1.00～1.32m	18～24cm	N39° W
3	2 ×6 間	4.87×14.08m	2.34m	68.6㎡	〃	0.80～1.10m	14～22cm	N38° E

②志波岡本遺跡…杷木宮原遺跡の約1km東側で，標高62mの丘陵突端部に立地
掘立柱建物4棟を検出した。建物に伴う土器ではないが，7ｃ前半の土器が出土

建物配列：2号建物は1号建物の8.8m南西側に並列して配置しており，建物の規模・方位は杷木宮原遺跡と近似する。3号建物は志波桑ノ本3号建物と直角に配置

特　　徴：1号建物は桁行が偶数の6間で，西に40°程振る。4号建物は2号建物と重複するが，長棟建物或いは柵になるか。

No.	規　模		柱間平均	床面積	柱掘方	掘方寸法	柱　痕	桁行方位
1	2 ×6 間	4.52×12.44m	2.07m	56.2㎡	隅丸方形	0.90～1.20m	18～26cm	N42° W
2	2 ×4α間	4.06×　－	－	－	〃	0.80～1.10m	－	N40° W
3	1α×3 間	－　× 5.46m	－	－	〃	0.40～0.70m	－	N68° W
4	桁行7α間	－	－	－	〃	0.50～0.90m	－	N42° W



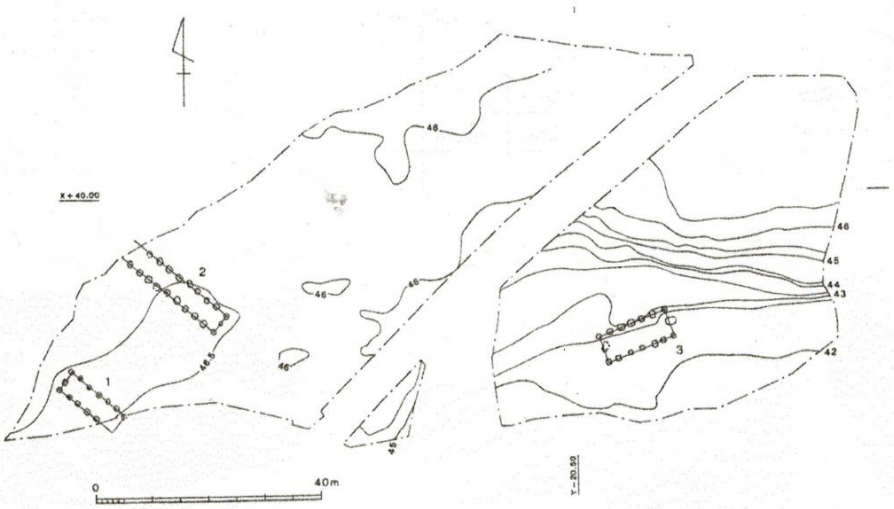
杷木宮原遺跡・志波岡本遺跡建物配置図（『九歴論集18』より）

③志波桑ノ本遺跡…杷木宮原遺跡の約550m東側で，標高42～46mの台地上に立地し，掘立柱建物3棟を検出した。建物に伴うものではないが，7c後半の土器が出土

建物配列：2号建物は1号建物の21.5m北東側に並列して配置される長棟（ながむね）建物。3号建物は1・2号建物とは方位が異なる。

特　　徴：1・3号建物は桁行が偶数の6間で，西に50°程振る。2号建物は長棟建物

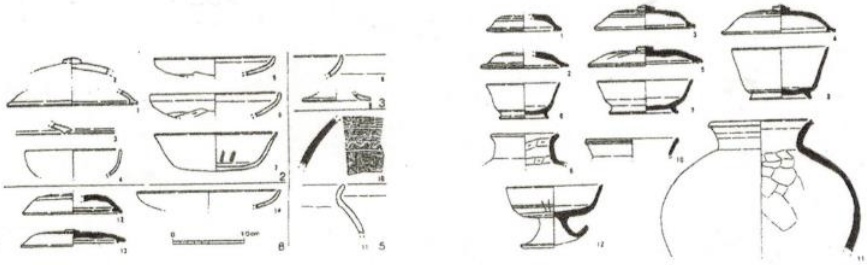
No.	規　模		柱間平均	床面積	柱掘方	掘方寸法	柱　痕	桁行方位
1	2 ×6 間	3.80×12.25m	2.04m	46.5m²	隅丸方形	0.60～0.95m	14～26cm	N51° W
2	2 ×9α間	3.60×18.61m	2.07m	66.9α	〃	0.60～1.10m	16～24cm	N51° W
3	2 ×6 間	4.64×12.40m	2.07m	57.5m²	〃	1.00～1.40m	16～22cm	N69° E



志波桑ノ本遺跡建物配置図（『九歴論集18』より）

④大迫遺跡…麻底良山より派生した標高53～64mの丘陵斜面に立地。斜面を階段状に造成し，掘立柱建物9棟，竪穴住居3軒を築造

建物配列：上段に1～3号建物と2・8号住居，中段に9号建物，下段に4～8号建物と4号住居を配置。中・下段建物群は桁行を南北方向に取るが，上段建物群は地形の制約を受ける。8号と9号建物の間隔(17.8m)は，8号建物の桁行をほぼ2倍にした数値



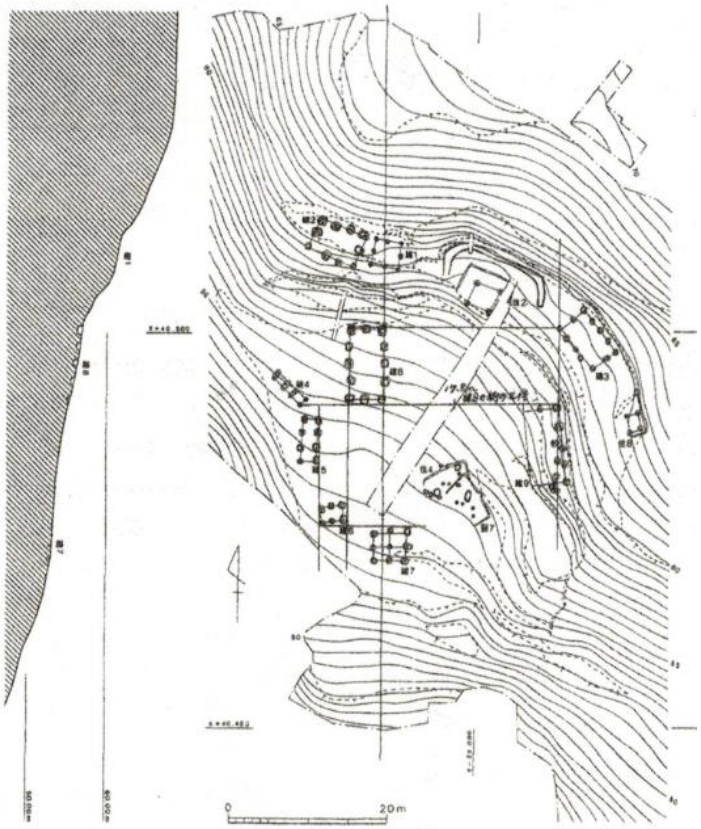
2・3・5・8号建物　　火葬墓整地層

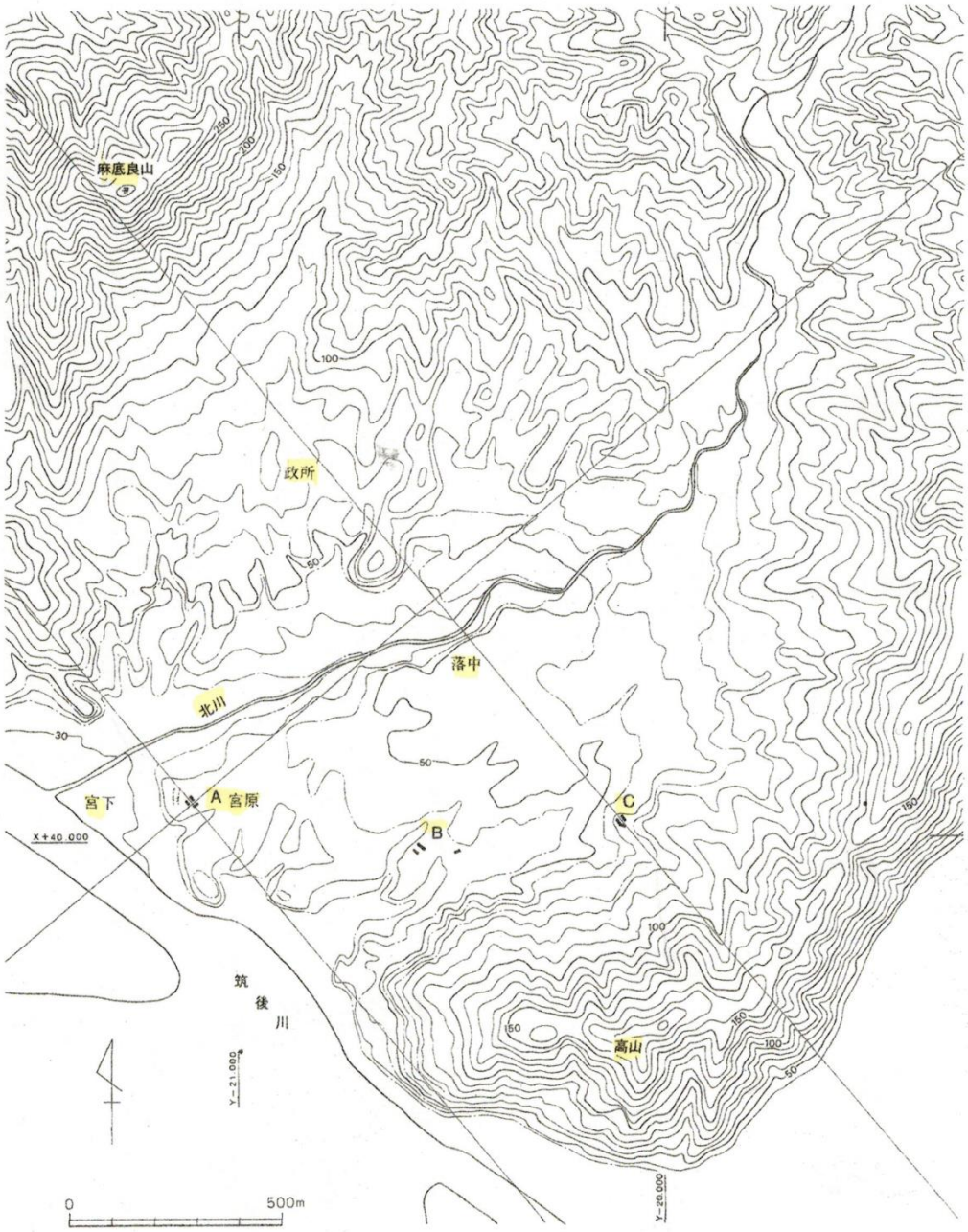
大迫遺跡出土土器

特　　徴：8号建物の桁行は8.84mであるが，この数値は杷木宮原遺跡の1号建物と2号建物との間隔及び1号建物と3号建物との間隔(8.8m)に等しい。また，志波岡本遺跡1号建物と2号建物との間隔(8.8m)とも等しい数値

丘陵南急傾斜地を階段状に造成して建物群が立地する。平野部への眺望が効くことから哨戒(しょうかい)的機能が考えられる。建物跡の時期は7c中～後半

No.	規　模		柱間平均	床面積	柱掘方	掘方寸法	柱　痕	桁行方位
1	2 ×2 間	3.26× 3.55m	1.78m	11.6㎡	円　形	0.32～0.47m	—	N82° W
2	2 ×3 間	3.94× 6.44m	2.14m	25.4㎡	隅丸方形	0.52～1.30m	20 cm	N68° W
3	2 ×4 間	3.76× 6.81m	1.70m	25.6㎡	円　形	0.53～0.72m	20 cm	N37° W
4	1 ×3 間	1.04× 4.98m	1.66m	5.2㎡	楕円形	0.50～1.40m	—	N46° W
5	1 ×3 間	1.92× 5.26m	1.75m	10.1㎡	隅丸方形	0.46～0.75m	12～16cm	N 4° E
6	1 ×2 間	2.04× 2.90m	1.45m	5.9㎡	〃	0.52～0.96m	12～18cm	N83° E
7	2×2間総柱	3.50× 4.16m	2.08m	14.6㎡	〃	0.54～1.10m	10 cm	N89° E
8	2 ×4 間	4.08× 8.84m	2.17m	36.1㎡	〃	0.70～1.10m	16～28cm	N 0° E
9	1α×4間	— × 9.34m	2.33m	—	〃	0.70～0.84m	—	N 7° W





志波地区周辺地形図（『九歴論集18』より）

A 杷木宮原遺跡　B 志波桑ノ本遺跡　C 志波岡本遺跡

建物跡群の時期と性格

【特　徴】

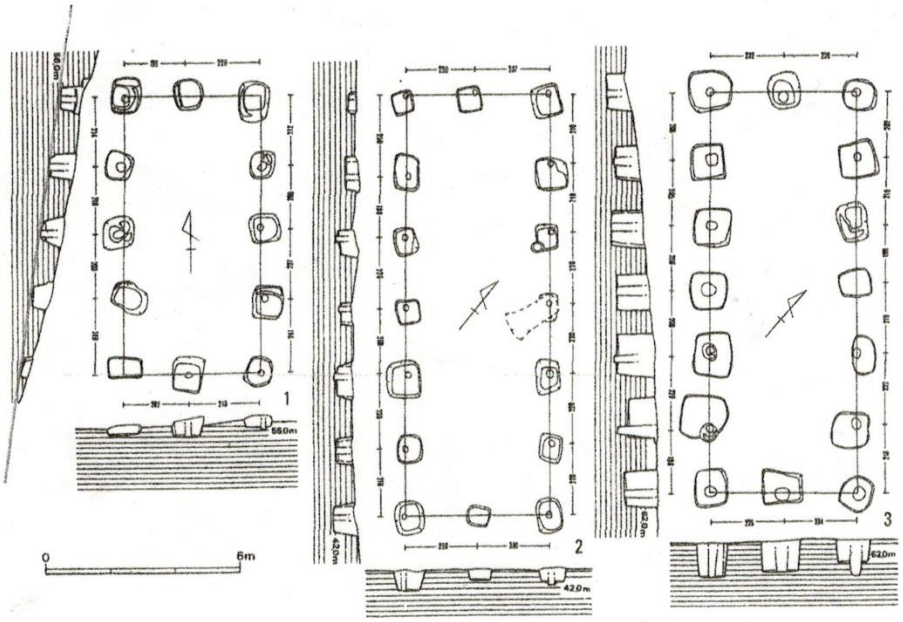
・掘立柱型式の建物で，瓦の出土はない　→　**屋根は板(萱)葺き**
・梁行2間×桁行6間の大規模な建物　→　**計画的な配置**
・建物方位は北から西に40°程振る　→　〃
・杷木宮原遺跡と志波岡本遺跡の建物間隔は同一間隔をとる　→　〃
・掘方は一辺1mを越すが，柱痕は20cm前後と貧弱　→　掘方内で柱の位置を調節可能
・柱穴底が平野部側に傾斜している　→　大規模な地山掘削を行わない**省力的造作**
・掘方埋土は突き固めておらず，単に埋めただけ　→　**簡略な作り**
・遺物が少なく，建物同士の切合いも僅か　→　**短期間で終焉**

【時　期】

・大迫遺跡の建物群は，8c後半～9c前半代の火葬墓群の下層で発見。火葬墓整地層には7c中～後半の土器を包含し，建物掘方内出土の土器も同時期
・杷木宮原遺跡1号建物の桁行は，大迫遺跡2号建物の桁行の倍数。志波桑ノ本遺跡1号建物の梁行は大迫遺跡2号建物の梁行とほぼ等しく，同桁行は大迫遺跡2号建物の桁行の二倍弱
　⇒　同規格　＝　同時期

【性　格】

※約1kmの広範囲にわたって**計画的に配置された大規模な建物群**で，**交通の要衝**をおさえ，かつ**防御的な立地**をするが，建物群全体としては**省力的造作**で，**短期間で終焉**したと考えられる。以上の点は，朝鮮半島及び倭国の**逼迫した状況**に即しており，志波台地建物群及び大迫遺跡建物群は**朝倉宮関連の施設**に比定できる。



大迫遺跡8号建物(1)・杷木宮原遺跡1号建物(2)・志波岡本遺跡1号建物(3)比較図（『九歴論集18』より）

朝倉宮志波説

1. 大規模建物群の存在

＊志波台地の建物群は，企画的に築造された大規模な建物群であるが，省力的造作であり，緊急事態には放棄しても何ら苦痛を伴わない簡易な造りの建物群が集合した程度の行宮であった。

2. 宮関連地名の存在

＊志波台地内には“**宮原・宮下・政所・落中**（洛中？）・**殿築**（でんちく）・**出殿越**（しゅつてんごえ）”と言った宮に関連する地名があり，筑後川対岸には宮の名称を冠した**橘田**の地名が残る。また，高山南麓の千代島には官衙遺跡と関連が深い**長者伝説**がある。

3. 斉明天皇の菩提寺である観世音寺との関連

＊斉明天皇の菩提を弔うため築造された筑紫観世音寺の財産目録である『観世音寺資財帳』の水田章には，杷木田・高山田とあり，官有地として管理されていた薗地（えんち）49町のうち約半分に当たる25町6歩が観世音寺の経済基盤として大宝2年(702)に施入されている。

4. 朝倉宮の場所

＊志波台地で発見された建物群は，建物規模・構造からして宮本体ではなく，**落中**（洛中？）地名が存在する志波小学校付近に存在するものと想定される。

上記のように、斉明天皇の朝倉宮は、志波の志波小学校付近と想定されている。

むろん、考古学的な調査に基づく最終結論というわけではないが、かなり確信をもって志波小学校付近とほぼ断定されている。

ご承知のとおり、朝倉・杷木地域は平成 29 年(2017)7 月 5 日から 6 日にかけて、台風 3 号および活発な梅雨前線による集中豪雨に見舞われて壊滅的な被害を受けた地域でもある。

これまで紹介した遺跡群のなかには回復不能な損傷を受けたものもあり、何よりも災害復旧工事・防災工事が最優先課題となっているため、今後の発掘調査がきわめて厳しい状況となっている。

志波小学校についても 2018 年 3 月 31 日をもって廃校となり、防災関連の拠点的施設の整備が進められている。

古代史の解明という立場からは厳しい環境となっているが、いつの日かふたたび新たな発見につながる発掘調査が行われることを心から望みたい。

斉明天皇は何ゆえこの地に朝倉宮を置いたのか

筆者はかつて、次のように述べたことがある(河村哲夫『神功皇后の謎を解く』原書房)。

> 上座郡に、朝倉橘広庭宮という斉明天皇時代の行宮名がある。「朝倉宮」と略して呼ばれることも多い。
>
> 『日本書紀』によると、斉明天皇七（六六一）年、百済再興支援の要請を受けた女帝の斉明天皇は、皇太子の中大兄皇子以下を率いて九州へ向かった。
>
> 三月二十五日に博多の那の津に到着し、五月九日に那珂川中流域の「磐瀬の宮」（福岡市南区三宅付近とされている）から「朝倉宮」に遷った。そのとき、「朝倉の社」の木を切り払って宮殿を造ったため、神の祟りを受け、宮殿は破壊された。宮中には鬼火が現われ、大舎人など近侍者に多くの病死者が出たという。そして、七月二十四日には斉明天皇自身が朝倉宮において六十八歳で亡くなった。八月一日に、中大

兄皇子は天皇の遺体を磐瀬の宮に移したが、この日朝倉山の上に鬼が現われ、大笠をつけて葬儀を見つめたので、人々はこれを怪しんだという。
　この『日本書紀』の伝える記事は、さまざまな謎を秘めているように思われる。

　まず、何故に斉明天皇が朝倉の地に朝倉宮を置いたのかということである。
　前述したように、安本美典氏の説を前提に、神功皇后の時代を西暦三九〇―四一〇年ごろとすると、斉明天皇はほぼ二六〇年後の時代のことである。卑弥呼＝天照大神の時代からいえば、約四二五年後の時代のことである。
　天照大神の事跡はおぼろげな記憶となり、神功皇后の事跡は比較的鮮明に残されていたはずである。
　天照大神、神功皇后、斉明天皇はいずれも女帝であるが、このような時の経過からして、どちらかというと斉明天皇の行動の軌跡は、神功皇后を意識したものが強かったに違いない。ただし、神功皇后の行動の軌跡は遠い祖先である卑弥呼あるいは天照大神の事跡を踏まえていたはずであり、結果的に斉明天皇の行動は神功皇后を介して「高天の原」時代に光を当てることになる。
　次に、「朝倉宮」を造営するため「朝倉の社」の木を伐採したために、神に祟られたという記事である。「朝倉の社」とは、朝倉市(旧杷木町)の「麻底良布（までらふ）神社」のこととされている。麻底良布神社は、麻底良山（標高二九四・九メートル）の山頂にあり、神功皇后が征伐した熊鷲の根城であったとされる旧甘木市の鬼ヶ城山から尾根伝いにわずか五キロ東南に位置している。
　麻氐良山の東南二キロばかりのところには、前述した香山または高山（標高一九〇・三メートル）もある。約一・五キロ南には九州一の大河である筑後川が東から西に流れている。麻氐良布神社は九二七年にできた『延喜式』にも記されている古い神社である。
　祭神は天照大神、蛭子の命、月読見の命、須佐之男の命、伊邪那美命、伊邪那岐命とされている。
　麻底良布神社は、同じ『延喜式』に出てくる対馬の阿麻底留（あまてる）神社の表記法と対比させるとき、「麻底良」は「阿麻底良」の「阿」が脱落したのではないかとする説がある（安本美典著『高天原の謎』)。
　このように考えると、朝倉の社はまさしく麻氐良布神社のことであり、もともとは天照大神を主祭神として祀った神社であったろう。その社の木を伐採したのであるから、神が怒ったのは無理がないように思える。聖地の神木であったからである。
　(中略)
　いずれにしても、朝倉宮は、麻氐良山を含み旧朝倉郡朝倉町と杷木町にかけて東西に連なる山並みの南麓のいずれかの地に所在していたであろう。今後の発掘調査が望まれるところである。
　それはともかく、「朝倉の社」の木を伐採して朝倉の宮を造営したところ、神の怒りに触れ、宮殿が破壊され、斉明天皇もまた急死したという逸話は異様である。宮殿の破壊は雷による火災によるものであろう、とする説もあるが、前後の流れから放火されたものであったかもしれない。
　仲哀天皇は熊襲討伐のために九州にやってきたが、朝鮮侵攻の神託を受け入れなかったために急死した。これについては、神功皇后や武内宿禰らのクーデターではなかったかとする説も根強い。
　一方、斉明天皇は百済支援のために九州にやってきて、朝倉宮で急死した。斉明天皇が神功皇后の朝鮮侵攻を意識していたのは間違いない。ところが、朝倉宮で急死する。この急死は仲哀天皇の急死に匹敵する大事件である。
　そうしてみると、中大兄皇子が斉明天皇の遺体を磐瀬の宮に移した日に、朝倉山の上に鬼が現われ、大笠をつけて葬儀を見つめたので人々はこれを怪しんだ、という記

事についても神功皇后と関連づけて解釈しなければならないかもしれない。笠は神功皇后の愛用品でもあった。

朝鮮侵攻派たる神功皇后の怨霊が同志の斉明天皇の死を悼み、愛用の笠をかぶって鬼の姿で現われたのではないかとも考えられるし、あるいは非業の最後を遂げた仲哀天皇の怨霊であったかもしれないのである。

この事件以降、甘木・朝倉地方はもっぱら斉明天皇の故地として知られることとなった。

ただし、先述したように、神功皇后が何故この地をみずから討伐したのか、斉明天皇がなにゆえこの地に朝倉宮を置いたかということについては、これまで余り議論されていないように思える。

「卑弥呼＝天照大神」であり、「邪馬台国＝高天の原＝甘木・朝倉」という安本美典氏の結論を前提に考えると、神功皇后の行動は「聖地奪還」であり、斉明天皇は大和政権発祥の地への「里帰り」ともいえる行動である。

女王たる天照大神あるいは邪馬台国の卑弥呼が居住した地域の第一候補としては、神功皇后と斉明天皇のこれらの行動からみても、この甘木・朝倉地域とりわけ「上座（かみあさくら）」地域を中心にした可能性が高いと思われる。

『魏志倭人伝』には、「男弟があって、佐（たす）けて国を治めている。（卑弥呼が）王となって以来、見た者は少ない。婢千人をもつて自身にはべらせている。ただ男子が一人あって（卑弥呼に）飲食を給し、辞を伝え、居拠に出入りしている。宮室・楼観・城柵をおごそかに設け、つねに人がいて兵器を持ち、守衛している」とあり、卑弥呼が居住していた区域は、一般の集落から隔絶されて独立していたようであり、神聖不可侵の神の座す場所として、まさに「上座」という名にふさわしい。

そして、「下座」の小石原（安）川と佐田川にはさまれた流域――とりわけ「平塚川添遺跡」のある丘陵地帯に邪馬台国の一般住民たちの集落があり、軍事・政治・経済などを実質的に取り仕切る重臣たちや兵卒たちの住居があったであろう。

天智天皇二（六六三）年八月二十八日、日本・百済連合軍は「白村江の戦い」で唐・新羅連合軍と戦って敗れ、ついに朝鮮半島から撤退を余儀なくされたが、翌年には福岡平野から筑紫平野に抜ける要衝の地に水城や大野城を構築して唐・新羅軍の来襲に備えた。天智天皇は北からの攻撃に備えて、甘木・朝倉地方および筑紫平野を死守しようとする姿勢を見せたのである。天智天皇の脳裏には、朝廷の聖地であり、母の故地となった朝倉地方の防衛という意味合いもあったに違いない。

神功皇后が、熊鷲を討伐したのち、

「安らかになった」

と述懐したのは、聖地を奪還した心からの喜びの表現でもあったろう。

冗談のようではあるが、「邪馬台」という発音は「山田」にも通じるともいわれている。空想をたくましくして考えれば、「邪馬台国」の中心地は、ひょっとしたら旧朝倉町の「山田」にあったかもしれないのである。

安本美典氏も、「山田という地名と邪馬台との音の近似も、気になるところである」と述べられている（『邪馬台国への道』梓書院）。

いまでも基本的にこの考えは変わらないが、残念ながらそれを考古学的に証明することができない。何度も述べるが、これまでのところ、「親魏倭王」の金印はじめ卑弥呼や邪馬台国と直接結びつく遺物や文書など、決定的な資料は出土していないのである。

これは何も、甘木朝倉に限ったことではない。吉野ケ里遺跡や平塚川添遺跡、平原遺跡など名だたる遺跡からも邪馬台国の女王卑弥呼と直接結びつく遺物は見つかっていない。あと一歩というところで、決定打が不足している。

それでも、近畿説のごとく「われ思う、ゆえに正しい」と、やみくもに暴走する気にはならない。一歩ずつ、着実に歩きつづけるその向こうに、かならずや光が見えてくるにちがいないからである。

（以下、つづく）